

趣味、仕事、子どもたちへ

加印いろえんぴつ 岸本ひとみ

高校の頃、時々図書室に閉じ込められそうになった経験があります。司書の先生が、私がいると、最後に書架の奥を見回って、声をかけてから閉めておられたようです。どこで本好きになったのかはわかりませんが、ものごころついた時には、「本の虫」でした。

今回、おすすめするのは三冊です。一冊目の、「蜜蜂と遠雷」は趣味の本。二冊目の「資本主義の終焉と歴史の危機」は仕事に活かす本。三冊目の、「13歳のハローワーク」は、子どもたちに勧めたい本です。

「蜜蜂と遠雷」 恩田 陸著 幻冬舎
本屋大賞と直木賞の両方を受賞した作品です。題材は、ピアノコンクールです。章立てが、エントリー、第一次予選、第二次予選、第三次予選、本選となっているところからして、他の本とは異なっています。教員をしている方は、ピアノを習った経

験がある人が多いと思います。私もその一人です。この本には、私が弾きたくても、全然弾けなかった曲を演奏する場面が、次々に出てきます。音の洪水を文章で表現しているようで、頭の中でそのイメージがどんどんふくらんでいくところが圧巻でした。特に、登場人物の一人、栄伝亜夜の選曲が私のお気に入りで、どんな少女なのかとワクワクしながら読みました。

一番好きな場面は、二次予選の課題曲を登場人物のそれぞれが、どんな演奏をするのか、解釈で悩んだり、他の演奏者の音楽を聴いて動揺したり、迷ったりしながらも、互いに響き合って、さらに深い部分へ踏み込んでいくところでした。

コンサートものという点、ありがちな他の演奏者の邪魔をしたり、わざと動揺させるようなことをしたりして、足を引っ張り合うものがけっこうあるのですが、これは全然そんなこともなく、曲と真摯に向き合

う若者の姿が丹念に描かれています。登場人物が全力で音楽と向き合っていることに、素直に感動しました。

コンテストに出場する若者たちは、英才教育を受けた人たちばかりではなく、主人公の風間塵は、養蜂業を営む父親とともに、世界中を旅するという異色のものです。でも、音は他を圧倒するぐらい凄まじい…。そんな意外性にも驚かされました。何と、本に出ている曲ばかりを集めたCDも発売されているそうなのです。でも、原作のイメージが壊れるので、聞きませんが。

「資本主義の終焉と歴史の危機」

水野和夫著 集英社新書

こちらは、社会情勢をどう見るかという視点で選びました。教育というのは、子どもたちが大人になった時に、どんな力が必要なかを常に考えて進めなければならぬ、というのが大学時代に教わったことです。では、現在の日本の教育とはいったい子どもたちをどう育てようとしているのか、

また、世界ではどうなのか、を立ち止まって考えるために、この夏読んだ本の中の1冊です。

リーマンショック以来、なかなか賃金が上がらない中で、子どもたちの生活背景は年々悪くなっています。それは、何事も自己責任という、格差社会アメリカの真似をしているように見えてしまいます。そうではない社会、最低限の生活がすべての人に保障され、子どもたちの教育を受ける権利が侵害されない社会をめざすには、その具体的なイメージを教員自身が持つ必要があると考えます。その一助になる本です。

著者の水野氏は、モルガンスタンレー証券のエコノミスト、内閣官房審議官などを歴任した人です。いわく「電子・金融空間」の中での、資本主義がもはや行き詰まっていて、いかにグローバル企業が利潤を追求しようとも、利潤そのものが枯渇してきているという論です。では、どうあるべきか。「・・・前略日本は、新しいシステム、**定常化社会**への準備を始めなければなりません。」と書かれていました。**定常化社会**とは、「資本が自己増殖と蓄積を求めない社

会」とあります。

私の稚拙な理解ですが、資本（大企業と理解して下さい。）が、自己の利益だけを追い求めるのではなく、公益性を優先させることで、格差をより小さくしていく社会ではないかと考えます。

私たち教員ができるのは、子どもたちが現代日本の矛盾点を感じることができ、それを具体的に表明できるだけの方法を身につけさせることです。それも、自分だけでなく、友だちや仲間といっしょに身につけることができれば、いろんな智慧を集めることができるでしょう。

最後には、やはり「読み書き計算」と「授業で子どもをつなぐ」に、落ち着いていきますね。

「13歳のハローワーク」

村上 龍著 幻冬舎

去年と今年、図書館教育担当をしています。新刊予算を見て、図書室用の本を購入するのが主な仕事です。図書館教育担当のいいところは、教科書関連本や職員の希望本以外の残予算で、自分が子どもに読んで

ほしい本を購入できることです。

この本は、高学年で職業について考えたときにぴったりの本です。まず、読みやすいです。タイトルも手にとりやすいものになっています。このシリーズで「新13歳のハローワーク」や、「14歳からのお金の話」池上彰著マガジンハウス、「14歳からの哲学」池田晶子著、毎日新聞社なども、置いておくといいと思います。

小学生だからといって、将来のことを考えないわけではないし、金融や経済を学習しないわけではないと思います。先の見えない世の中、予測不可能な世の中と言われているからこそ、子どもたちにこんな本をそつと勧めていくのも、大事な仕事だと考えます。

最後に、私はどうも電子書籍が苦手で、家の中が本だらけになってしまいます。定期的に、ブックオフに運んで行きますが、1カ月ぐらいい箱に入れて、背表紙が見える状態で放っています。そこから出した本は売らないことにしています。この3冊で1年後に手元に残っているのは???です。